



Title	対談『清朝考証学の研究』（上）
Author(s)	加地，伸行；近藤，光男
Citation	中国研究集刊. 1989, 7, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60904
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

対談『清朝考証学の研究』（上）

著者 近藤光男

読者 加地伸行

加地 それでは、始めましょうか。まず、第一篇・第二篇とありますこの御本の全体の構成なんですが、第二篇は「その典型を見るについては、ここから誰一人をもとりこぼしてはならない。また一方、余人を安易には一人としてここに加えるつもりはない」（三頁九行）と。恵棟と銭大昕と戴段二王と。ま、阮元は入ってますけど。それでよろしいですか。

近藤 ええ。じゃあ、第一篇は何を考えたかということでございますけれども、清朝考証学を考える具体的な手続として、全くの布衣に終った江藩が書いた『国朝漢学師承記』。一方は、乾隆帝の威容をもってできた『四庫全書』と。

加地 対比。

近藤 『四庫全書』をほとんど全部扱った紀昀、これが余人に当たる。

加地 うーん、おもしろいですね。

近藤 ということで、清朝全体を見たいと。それから、もう一つ。読者に、私の本全体の趣旨を知っていただくために、「清

朝漢学のかたち」を最初に置きました。清朝の水準の高い学問では、「述べて作らず」の精神における祖述が尚ばれる。もつとも「作らず」と言いながらも、そこにやはり文学意識があった、実は「作り」もするけれど、しかしそれは祖述という根柢を失うものではないと、大体そんなことを。僕のこの本の立て方っていうのは、所詮、今まで発表したものを集めたに過ぎないけれど、しかし、どういう資料を選択するか、あるいは、どういう資料を取らないか、そして、それをどう配列するか。黙って並べておくだけでなるべく議論はしない、説明しない。

加地 微言大義ですね。（笑）

近藤 まさに。第一篇はどういう意図で構成したかはいわない。それが清朝漢学のかたちであり、方法である。（笑）

序説

加地 「洗練された言語感覚と鋭敏な文学的直観とが、〈経〉の文字に潜む古聖賢の思想の深奥を探り当てるのである」（二

頁倒數三行」と。こういうふうにとータルな形で清朝考証学を把えるということを、こういう表現でなされたのは先生が初めてじゃないですか。

近藤 これは私自身のことばのつもりです。ま、しかし、恐いのは後で吉川先生のものを読んだと、「あ、ここにあった」ってのがよくありますので。

加地 いや、それはいいじゃないですか。類比的にいいましたらね、戴震がね、吉川幸次郎ですよ。

近藤 ああ、そうですね。

加地 そしてね、段玉裁が先生ですよ。(笑)

近藤 いやーもう、穴があったら。いや穴を掘って入ります。

加地 熱情あふれるあの戴・段の關係。先生の書かれてるところでね(戴震と段玉裁―その手跡をめぐって―三六八頁)、そのイメージがパーッと出て来たんですよ。師匠さんに対して、先生のそのお気持ちが無意識のうちに投影したのかなあと思っで、非常におもしろかったですね。で、先ほどのお話へ続きますけれども、「余人を安易には一人としてここに加える気はない」と。こうなりますとね。(笑) やーこれは厳しいなと思ひまして。で、先生、いわゆる「証無くんば信ぜず」(五頁)という、これが実証主義なんでしょうか。

近藤 さて、ここが恐い。哲学の方の、厳密な哲学用語の使い方を知らないで使ってるかもしれないので。

加地 「証無くんば信ぜず」といった場合、証が出て来ない場

合はもう、疑いを残すという形だけ、となるんじゃないか。

近藤 と思いますね。ただその、推論っていうのがおもしろい。推論というのも一種の証だと、これちょっといい過ぎかもしれないけれども。

加地 ここですね。実証主義の大問題点は。全てに渡っての証拠なんて、あろうはずがないんですね。資料と資料との間には、必ずジャンプがある。推測ですね。推測して証拠をつないでいくわけです。

近藤 “不連続の連続”。

加地 そのジャンプしているところは証拠ないんですね。実証主義がとことんいくと懷疑主義に陥いる。徹底した実証主義者は何もいえなくなってしまう。それから、「文字の研究↓言語の研究↓古聖賢の心の把握」(六頁八行)と、こういう形で考証学、清朝考証学を全体として把える。

近藤 戴震が解説している、と。

加地 清朝考証学といえ、いわゆる考証に没頭せしめて、政治的なところから目をそらしたんだとか、明学のムチャクチャな勝手気ままな議論に対する矯正といえますか、だいたいそういう教科書的な理解がありますですね。そういうのとは違うんだ、というところが、やはりいちばんおっしゃりたかったわけでしょうね。

近藤 ええ、そんな理解では困る、と言いたいです。ただ、この「文字↓言語↓古聖賢の心」ですって、戴震はやっぱ、

これをタテマエでいつている、実は。ホンネは東原先生これをひっくり返している。順序を。

加地 なるほどねえ。その飾りつけのために、前にこう置いてる、と。

近藤 だからこう、何か、人に説く時はこれ少しも間違っていない、こうでなくちゃいけない。これをもし守らなかったら学問でなくなる、論文も書けない。(笑) だけど、実はこういう順序を作るために、生きた人間の精神構造の中では、この順序を逆にやってる。古聖賢の心はこうに違う、と。そうすると、この言葉はこういうことをいつているに違う、この文字の意味はこうであるに違う、と。

加地 逆にね。結論がまずあって。この件、後でもう一度議論しましょう。

○

第一篇

『国朝漢学師承記』と江藩

加地 『漢学師承記』、最近ほとんど読まれていないような気がするんですね。

近藤 かつては中哲の大事なテキストだったようですね。神田の書店街にゴロゴロしてました。石印本に書き込んだやつが。

加地 先生は『漢学師承記』の文は読みやすいとおっしゃっておられますね。でも逆にね、読みにくいところもあるんじゃないですか。

近藤 結論から先に言いますとね、駢文の方が古文より読みやすいという前提があるからです、私に。駢文なら四字句のリズムにそろえて、圧縮した形にしておいてくれるのに対して、古文ですと、どこで句読を切ろうか、ってことになるかもしれない、というような。

加地 この『漢学師承記』の文章はコンパクトであるが故にですね、具体的な事実の問題につきましては、四〇頁に並べておられるの見て、原文の方がわかりやすいんじゃないですか。

(笑)

近藤 こりゃまあ、困りましたね。

加地 原文と並べたらですけども、かなりコンパクトに。ちょうど『宋元学案』なんかのね、あれなんかも非常にカットしたんですね、伝をですね。

近藤 ええ、常にそうですね。

加地 省略してあるでしょ、途中飛ばしてますからね、時間的な経緯が飛んでるもんですから、だから『漢学師承記』の場合にも、わかりやすいのかわかりにくいのか、ちょっと私にはわかりにくかったです。それから「戴震のリズムは、狂ったリズムでまとまっている」(四二頁七行) っていうのは？

近藤 これ、実をいうとねえ、倉石先生のおことばですなあ。よくおっしゃったもんですから、ついそのまま。狂ったというのはちょっといい過ぎだったかな。(笑) 「一日、見」以下ですけれども、ここに莫大に長い句がありますでしょ。そのあと、

「周礼を徴引し」とここで四字句が出て、「之を奇とす」とばんと終る。こういうのがリズムが狂うということかと、私、勝手に理解し、ここで実例に引いたわけです。

加地 ああ、そうですか。こういうところ不思議な感じをお感じになれるわけですか。そうしますとですね、このリズムのことなんですけど、例の韓愈らの古文復興運動がありますね。六朝時代の駢文はやはり貴族の文章だろうと思うんです。高い知識と深い教養とが必要ですね。ところが唐代になって韓愈が古文を出して来る。これやはり、科擧制度で成り上って来た連中が、自分のことばをね、持ち出して来たんじゃないかと思うんです。白楽天なども俗語を混じえていくというスタイルですね。そうすると、駢文に対して韓愈・白楽天という古文やら俗語を用いるというような形で、自分のことばを科擧出身者が持つて来たんじゃないか、と私は思ってるんです。その時代のことばを持つていたと思うんですね。そうすると、清朝の人達が、自分達のどういう文体、ことばを持ったか。それは駢文でしたということになってるんですね、御説明だと。

近藤 学者は、ですね。

加地 その学者の駢文の意識というのは、どういう意識なんでしょう。このことば、自分達のことばとしてならば、どういう結びつきがあるんでしょうね。

近藤 努めて口語的に書こう、ってのと反対の方向に行ってるわけでしょうね。

加地 非常にこう、ハイレベルな文章ですね。

近藤 はい。専門家の中のことば。駢散文というよびかたがあるようですね。『文選』の駢文に対して、清朝の学者達が書く駢文的な文章は駢散文と。

加地 なるほど。駢文的なスタイルを持った散文という形ですね。

近藤 はい。駢散文、それがその「言不尽意」^{イェンツァンイ}、『易』の「言は意を尽さず」ですね、それでは困る、尽さないところを補填するはたらきのあるものとして駢文を考えていたんじゃないか、と。

加地 ところがですね、清朝考証学で論理的な問題を扱っている場合、駢文よりは古文の方が自由にきっちり物がいえるような気もするんですけれども、そうじゃないですか。

近藤 ええ、それもわかりますけれども、たぶん古文には無駄が多いと考えていると思います。だから、古文的でも結構なんですけれども、努めて無駄のない文章を書こうとしたのが清朝の学者達ではないか。

加地 なるほどね。

近藤 私、全然不勉強な方面の、例の桐城派の古文、清朝でも桐城派の人達、ああいう人達が書く散文と、それから、それこそ銭大昕、今の戴震でも結構なんですが清朝一流の学者たちが書く文章とは、かなり違うと思うんですね。

加地 いつの時代でも自分達のことばっていろいろを持っている

と思うんです、主流は。そういう意味でも、清人の考証学者達
 が持っていた駢文の意識というのを、いつか、どこかでお書き
 下さるとたいへんありがたいですけれども。ところで、ふつう
 『漢学師承記』といいましたら、学問史、学説史の内容として
 しか把えないものを、先生がこういう形で、文学としての『漢
 学師承記』というのを扱いになる。これ、始めてですか？
 近藤 ええ、まあ始めてなんていうのは恐いんですけれども、
 誰かの真似ではございません。

加地 こういう形で見ていけば、中哲関係の文献といわれるも
 のも、新しい角度が出てくると思いますね。我々としては非常
 にありがたい分析と存じます。

近藤 ありがとうございます。

加地 それから、皖派は礼学であり、呉派は易学である、とい
 うところです。（五九頁倒数三行）これ、おもしろかったです。
 やっぱ、礼と易とではだいたい違いますよね。

近藤 なるほど。

加地 礼の学は、やっぱり実証主義ですよ。

近藤 はい。名物制度の学ですからね。

加地 で、易はこれやはり、議論の学であり、学派の好みが、
 経書の選択に出る、という感じがしました。これ、私あつと思っ
 たですね。易と礼というのは、ちょうど対照的な感じ、思考法
 ですね。易では名物制度考えようがない、あつたつてそれを加
 えようがない、大勢に影響がない。これは、経書の選択と学派

との関係という意味で、非常に勉強になりました。

四庫全書と紀昀

加地 えーと、四庫全書と紀昀の学問とは、さきほど大体、狙
 いをお話し下さったので。つまり、四庫全書なるものの総体を
 紀昀を通じてお考えになる。

近藤 紀昀は總纂官としてなかなか持平の論をする。公平だっ
 た。彼は宋学がたとえ嫌いでも、公務として四庫全書にはきちつ
 と価値のあるものは入れる。だけど、『閱微草堂筆記』の中で
 彼の作る小説のお蔵には断固入れない、と。そういうおもしろ
 さがあったと思います。紀昀の学問も結構そういう点で、まこ
 とに四庫全書にはふさわしい人物だったな、と。決して考証学
 の典型として、紀昀の姿から考証学の姿を見ていただきたくは
 ない、ただこうとは思わないけれども、だけどやはり、こう
 いう人物がいた。

加地 この九〇頁のところ、私は非常に勉強させていただきま
 したが、二行目からですね。「経香」ですか。それから、七行
 目の「その一字一句から濃厚な香を発する。これこそ経香閣の
 名のいわれなのである、云々」とありますね。で、私ほつと思っ
 たんですけれどもね、代々の学者の家を「書香家」といいます
 ね。文字の持っている本来のことばのにおい。

近藤 あ、なるほど書は文字ですね。

加地 それから、まさに本の持っている物的なおいといいま
 すかねえ。読んでまして、書香家ということば、こういうのと

関係あるのかなと思っただけです。

近藤 ごく近い過去まで、実感があつたでしょうね。今の若い人に書香家って言つたて、ピンとこないかもしれませんけれども。

加地 葉の香しますもん。本を開けたら墨の香なんかも、ぱーとね。古いもんでしたら、開けた時に墨の香がします。ところで、九一頁なんですけれども、『周礼』お好きなんじゃないですか。あんまり関心ないですか。(笑)

近藤 『周礼』が何かに引かれてまして、孫詒讓の『正義』を開きますと、うわあて思います。(笑)ただ、ついでに言っておきますと、あれは清朝考証学の最盛期の時期を過ぎたものなんです。

加地 ああ、そうですか。

近藤 ついでに、重要なことっていうと大げさですが、あの『周礼正義』をですね、もし乾嘉の学者が書いてますと、もっと簡潔なものにしたはずで。

加地 はあ。あれはつまり考証学のデカダンスですね。徹底的に考証そのものに行つた結果なんでしょうね。古人のことはもうどうでもいいわけなんです。(笑)

近藤 そういうところあると思うんですね。兪樾あたりまでいきますとですね。私は、集英社の漢文大系『戦国策』の作業をしたとき感じました、あることばについての考証が……。

加地 横へ……。

近藤 王引之・王念孫がやってくれると、もうみんな取らざるを得ない。兪曲園先生のは、一生懸命読んで、待てよ、取ったものか、やめたものか……と。

加地 判断がむづかしい。

近藤 やはり、清末の学と乾嘉の学との違いっていうのが、いみじくも今出た……、デカダンスとして、うわーとやってあつても、こつちが熱心に読んでいけば然るべきところを拾えばよろしいわけですからね。だから、やつぱり役に立つと思うんですね。

加地 そりやそうですね。で、話としては、先生の今回のとは、ずれると思うんですけども、『孝経』の問題で「孝経はもう論じない、云云」(九六頁)とあるんですけども、これは。近藤 ここはぜひ教えていただきたいとこですよ。何かこれ、書いた時にちょっと不安なままで書いた覚えがある。何でしょうか。

加地 宋学の場合は孝はもちろん大事な問題ですけども、例の『論語』、「仁を為すの本」と読め、と変えましたよね。ああいうふうには、孝は大事なことですけれども、そこから始まっていくという形になっていく、ということも『孝経』の位置づけ、重んじなかつた理由になってくるんじゃないかと思うんです。もちろん、孝というのは大事なことですけれどもね。それで、孝から始まるという形で、孝は最終ポイントではない、という意識があつたんじゃないかと思うんです、宋学には。

近藤 はい、はい、宋学にはね。

加地 ですから、『孝経』がまず始めに誰でも心得るべきものだ、というところへ行つたんじゃないかと思うんです。

近藤 この一四頁の、経部の総叙のところですけれども、土曜談話会で油印本で訳注を出しましたのに重大な誤訳をしていますので、私はここで訂正させていただいております。油印本では、経学の限界、経学は訓詁学という限定されたものだ、という訳になってるんです。私が代表者でありましたから、担当者の責任ではなく、私の責任なんですけれども、重大なミスをしておりますね。実はこの本の中で二度ぐらい出して訂正してまうけれども、「経」ってのは、それこそ聖人の心という清朝考証学が肉迫しようとする、そういう終極にあるものですから、それを『四庫全書』に著録して、やれここの文章下手だから上手だとか、そんなことを論評するものじゃない、と。だから『四庫全書』には著録しないと。たとえば『易』の繫辭伝の本文とか、そういうものは一切入れない。ただし、繫辭伝に何か注をつけたもの、それなら入れる、と。だから、所詮『四庫全書』の経部に著録されているのは、経注である。経解釈を試みた物ばかりである、経そのものは著録しないと。

加地 なるほど。

近藤 集部へいきますと、杜甫の詩そのものも著録します。だから、『杜工部集』も入れてから『九家注』も入れ『杜詩詳注』も入れる。『九家注』と『杜詩詳注』でやめるっていうのが経

部の処理。決して孔子の『論語』ってのは入れない、何晏の『集解』ならば入れるけれども。そういうことを、これ宣言している。ところが、こともあろうにこれを大誤訳しまして、経学の限界は訓詁学にある、というふうに訳してるんです。

加地 わかりました。それを直しておられるんですね。「もっぱら経解釈をこころみた書物のみとなる」と。それだったら、もっと詳しく説明しておかれないと。(笑)

第二篇

加地 最初の「呉郡惠氏三代の文学」ですが、このねらいを一言でおっしゃって頂きましたらどういうことになりますか。

近藤 学人の詩、清朝学人の詩はですね、意外と性靈の詩であると。格調では必ずしもないと。「学人の詩・詩人の詩」とは、『思適齋集』顧千里の言葉です。(一三五頁三行)

加地 「世の詩を論ずるもの、以為らく学人の詩有り、詩人の詩有り……」この「学人の詩、詩人の詩」というのはいい言葉ですね。清人のいう学者と現代の学者とは、意味が違いますから、同じ学者といっても、ちょっと学人の意味が、概念が違いますね。教養人でしょ。

近藤 はい。

加地 教養人の詩と、詩人の詩というべきですかね。非常におもしろいですね。

近藤 はい。吉川先生はまさしく学人の詩を作られた。だから『箋杜室集』というものの中にみごとに。

加地 ああ。私に下さった詩もそこに一首あるんですよ、私が留学しましたころの「加地伸行台湾に在り」という題のがちゃんと。学人の詩として。(笑) 私は文学がわかりませんので、いろいろお尋ねできないのが残念なんですけども、この「門外野風開白蓮」のところですが。(一五四頁) このところ、発音を示されて、「緊張に始まって開放へ、暗黒が解かれて黎明へと移るのを思わせる」とありますね。ちょっとご説明願えませんか。この音調がどういうふうに。

近藤 はあ、いや、吉川先生の音声論とか言われるものなんですけど、*mén wai* (門外) の *mén* は唇をつむって始まり、*ai* も丸くすばめて始めます。ところが、*yě fēng* (野風) の *yě* はまだ口が細く、*lóng* 辺りから、やや開いてきてそこで小休止、そして *kāi bái lián* (開白蓮) の *kāi* は非常にこう大きく開いた明かるい音がいきなり措かれて、*ān dìng* と、安定した音に終る。加地 しかし、*wāi* も *kāi* も *āi* は同じやないですか？ (笑)

近藤 クー (苦笑)。しかしその次は *āi* でしょ、これは違います。

加地 *yě fēng* はあはあ。しかしその次は *āi*、その次は古文風に *bō* とお読みで。しかし、これ、もし今のふつうの学生が読んだら *kāi bái lián* ですね。

近藤 の方が……。

加地 余計に開放的じゃないですか (笑)

近藤 (笑) 案外、王漁洋、北の人ですから、*āi* と読んでたかもしれない。

近藤 加地、(笑)

加地 この辺は難しいですよ。

近藤 やられた。(笑)

加地 これ *āi* と読んだら口がすぼんでくるんじゃないですか。(笑)

近藤 参りました。(笑) いや、ちょっと待って待って。さればこそ読書音が必要です。「白」は入声ですから、読音の *ō* であるよりも更には *ō* であって、読音はまだしも *ō* に近い。磨滅した北京音の *bái* では平平平となっていわゆる下三連の病を起こします。読音で読めばまだしも救われる。いくら開放に向った場所でも平仄平でこそ近体詩の韻律が調うわけで、それは「開放」にさしつかえません。

これね、私どもが東京帝国大学で支那語を習い、それから古文、古典を習った時にね、「白」を *ō* なんて読んだらたちまち無学な者と笑われますよ、てよく教えられたんですね。ところが、この頃はもう中国の学者がそう読んでいるらしいですね。だめですねえ。私はもう意固地にね、実は今も学生諸君に「中国では亡んで日本で保存された古典もある。一つ日本でこういう古典の読み方を保存しよやないか」なんてね。

加地 まったく同感です。で、読音の場合は、どういふものを

スタンダードにされますか。

近藤 私は注音符号による『国語辞典』。

加地 中華民国になって、これは読音とする、これは語音とすると決めた、その線でいらっしやる。

近藤 その発音字典が出ましたでしょ。

加地 『国音常用字彙』ですね。

近藤 はあはあ、あれ標準にして。

加地 それと『康熙字典』辺りですね。私も阪大の中哲の演習の場合も、訓読したあと、必ず音読させ、私も範読しますが、読音があればしっかり覚えさせています。「我」をわ・「他」をたというふうにとことん。私も、もう意地です。(笑)

じゃ、次入りますようか。銭大昕ですね。非常におもしろい、こういう人があるというのはいもう、大変おもしろい。「溫柔敦厚」の詩の教えを越えた激しい性情の流露が認められる」(一七〇頁倒數二行) 銭大昕だけじゃなくて、ほかの段玉裁の場合も戴震の場合もそうですけど、先生のおっしゃるのは、何か、その人間が持っていた感情の、その発露と言いますか、そういうものが先ず、こう、現れて出て来るんだというものを見ようとなさっている、そのようにお見受けしたんですけれども。近藤 それを、こう皆さんに見て頂いて、清朝考証学の、その古いイメージ、古い言うたらなんですけど、それを除きたいと……。その、生きた人間がしたんだと、血のかよった人間がしている学問なんですと。で、詩を作らしてごらんさいと。

加地 よくわかると。その場合ですねえ、そうすると、学はどうなるんですか。学といいますが、論文の方はですね、そこにはその、それはあくまで冷徹な客観的な、そういうもので、詩の場合にそれが出るという……。

近藤 いや、その学の根柢にそういう性情が有るのが清朝考証学だということを、この書全巻を通じて言いたい。

加地 なるほどね。そういう人間が行っている学問というふうに見ないといかんという訳ですね。

近藤 はい。だってそれが自然に学問にも反映して学問の根柢に有ると。例えば段玉裁がそれだと。

加地 なるほど、はあはあ。

近藤 『説文』の注をカッカと書いて喜んでるんじゃないと……。加地 わかりました。で、「銭大昕の文学」、これを一言でおっしゃるなら。

近藤 文学の根柢は学であると。文学の根柢には学が有る、学が必要であると、経学イコール文学だと。

加地 そこ先生、ご説明いただけませんか、経学イコール文学。そこが一番、みなが関心を持つところだと思うんです。

近藤 私も果して論証できているかどうか自信が有ると言えません。あまり大きな問題からお答えしちゃうたんですけれども、直接の問題としては、銭大昕は明の古文辞の流れに好意的な沈徳潜に詩を習っている。考証してみると、たった一年間なんですけども、沈徳潜の弟子だから銭大昕も格調の詩、という文学

史的な位置付け、それは、

加地 おかしいと。

近藤 違うんじゃないかと。まあ、はっきり言えば、彼の詩はお父さんから習ってるし、それから惠棟はそのおじいさんが漁洋に親炙した人で、惠棟は漁洋の詩に注して「小門生」と称している。そこから錢大昕の詩というのは、やはりむしろ……。

加地 王漁洋。

近藤 ええ、漁洋とも繋がるし、それから友人に袁枚、といいますと、それこそあの『漢学師承記』の中でももう味噌羹ですし、清朝の一流の学者達から齒牙にもかけられなかったみたいな印象の袁枚と人間的にも親しくしてるし、それから、なによりお互い詩論が相似てる。だからその袁枚のあいう生き方、人間性というものを、錢大昕は理解できる人だったと。およそ清朝の詩の歴史の上で、錢大昕辺りが学人の詩の系譜の一番重要な位置にいる人だ、学人の詩の系譜も、惠棟→錢大昕と流れてくるんだとそういうことが言いたかった。

加地 ああ、なるほど。文学史的な錢大昕の位置付けを新たにされたところが一番大きなねらいですね。

近藤 私は錢大昕の学問そのものを戴震のようには一向掘り下げてないんで、むしろ、いつも戴震のあとに出てきては戴震の補完をしたというような格好で錢大昕が出ています。しかし錢大昕という人は清朝考証学で重大な、それこそ誰も異議ない典拠型だと思う人で、その人が一方、文学史的にはそんなふうに位

置付けられるんじゃないか、性情あふれる詩を作ってる。で、まだお尋ねございませんけど、彼の「木綿花詩」というのを、この本に入れときましたのも、その実証のためで、それこそ今のいわゆる人民大衆の中へ入った人である、だから同じ事柄を歌ってても人民大衆を客観視して歌ってるお役人とはちがう、それを対比すると、錢大昕がいかに性情溢れる詩人であったかという事が……。

加地 はい、わかりました。ところで「家具無多只一身」（一九二頁一行）これは「多く無く」じゃないんですか。

近藤 いや、これねえ、初め学報が何んかに書きましたときは、先生のおっしゃるように読んでたんです。

加地 いけないんですか。

近藤 おかしいなと思いましたがね。そんなこと言う必要無いですもんね。辛うじて、蓮の実で、生計を支えてる人達でしょう。その人が家具が多いか少ないかてなことを、錢竹汀先生が、ここで詩に歌うはずは無からうと、はっと気が付いた……。

加地 先生、これは注が要りますよ。

近藤 そうですよ。これ、そのまましておく……。あるいは「無多」は口語的な表現で「ほとんど無い」ことを云うように、「家具、無多くして」とでもしたらよかったかもしれませぬ。

加地 えっと、さっきのところに戻りますが、「轉益多師、滌淫哇而遠鄙俗」、それは「詩之識也」だという（二〇二頁）こ

の「轉益多師」。たいへん分りにくい。先生、どうですか。

近藤 私の『唐詩集の研究』のですね、七一頁に引いてありますが、これはあの、有名な、杜甫の論詩絶句の初め、論詩絶句と題しておりませんけれども、「戯れに六絶句を為る」という、これが論詩絶句の草分けになるわけなんです。その最後の第六首目に見えるのですね。

加地 これ、わかりにくい言葉です。「袁枚の『隨園詩話』に云云」とあって、その中ですね、この「識」とは何かと。

「假に銭氏の説明によって理解するならば広い学識によって生まれる洗練された上品さを言うのであらう」（二〇二頁倒数四行）、とありますので、見てみたらこの「轉益多師」。下句はわかりますよ、「濂淫哇而遠鄙俗」。しかし上句は何であらうと思つて。（笑）それでですね、一生懸命考えたんですよ、この四文字がわからない。意味がねえ、どう読んでもね。で、これはと思つて調べたら杜甫の詩らしいんですが、この対談までもう時間切れだったもんですから、先生とこへ電話でお話して、杜甫の詩ではないでしょうかと申しあげました。

近藤 よくご注意下さったと思うんですね。だから慌てて見直してきたんですけども、沈徳潜がこの詩を『唐詩別裁集』に収めてまして、沈徳潜曰くね、「焉不學之意」（いづくにか学ばざらんやの意なり）と、論語の三字をもってきたましてね。だから、どこだって勉強できる、なんでもお師匠さんだと、そういう意味に沈徳潜は解釈してますね。

加地 うーん。

近藤 私、論文と言わず、何と言わず、原文引きつ放しということは、絶対しないんですね。唯一してるのが、ここだったんです。

加地 そうですか。（笑）

近藤 そうすると、おかげでね、例えば、その近くにある「放筆」という言葉ね。

加地 「放筆」、はいはい。

近藤 「筆を放てば」、これ、やはり杜甫の詩なんですね。

加地 はあ、そうですね。「放筆千言」。

近藤 それから「灑を揮う」、^{さい}「揮灑」という言葉ございますね、「放筆千言、揮灑自如」と。

加地 はいはい。

近藤 その「揮灑」、これも杜甫の詩ですねえ。それで慌てましてね、これ全部杜甫かと思つたら、さすがにそうはいきませんけどねえ。その「経を含む」、「含経」、これは文選の任の「王文憲集序」です、ええ。その次の「咀史」、「史を……」

加地 「読む」ですか。

近藤 これは、なんとまあ、「咀^かむ」、「史を味わう」。これだけございませんでしたけどね。あつそつだ、「無一字無來歴」この「一字として來歴無きは無し」はですね、僕の記憶ですけども、黃庭堅が杜甫の詩を評した言葉なんです。だからねえ、徹頭徹尾、杜詩でやってる。

加地 なるほど。

近藤 お電話のおかげなんです。いやあ、やっぱりこれは、一頁ぐらい使って、中身を解説しないと。

加地 そうですね、それが一番。これは詩論でしょ。「シ」で歴史の「史」と、ポエムの「詩」と、両方の問題有りますからねえ。

近藤 なるほど。史論に詩論を重ねてるんですね。

加地 そうなんですよ、ものすごく重要な文学論なんですよ、これは。だからここを、出処に詳しい近藤先生ともあろう方がですね（笑）。私はここでつまずいた訳ですね。（笑）それから、この二二一頁、いよいよ、「木綿花歌」のところでですけども、この詩、おもしろい詩だなあ。詩自身が非常におもしろいですが、も一つおもしろかったのはですね、この詩の近藤注ですよ。（笑）

近藤 はあ。

加地 これこそ考証学ですよ。（笑）何と申しますか、先生が植物のこと、かんかんになって調べられたんじゃないですか。これ、もう必死になって。（笑）

近藤 そう言っていただけのおかげで思い出しましたけれども、これ、私ですね、銭大昕の詩に、清儒が注したらどんなふうになすだろうかと、それを意識してこの注をかけた訳です。そして、その自ら作りました注に自ら疏を、これは日本語で書いた訳です、はい。

加地 現代の学問も駆使しながら。（笑）この辺りは孫詒讓ですよ。（笑）

近藤 いや、お恥しいです。

加地 本当は、マルキストなどは、こういう詩をカッチリと読むべきですねえ。こういう問題の持っているものを取り上げないと、マルキシズムの観念だけではね、どうしようもない。じゃ、先生、次の戴震に入りたいんですが、いよいよ戴震の、本番中の本番というところへ来ましたが。先生、ラシヨナリズムという問題。ヨーロッパ人は感覚的世界が先ず根本にあつて、次は知性と言いますか悟性と言いますか、その世界が有って、その上に、神を見る理性の世界が有ると、こう考えてるんですね。ですから大体、ラシヨナリズムという場合には、神を見る、そういう最高の智慧、位置づけとしては、神を見る目のようなもののようですねえ。

近藤 へえ。

加地 はあ。しかし近代では正に、知性的な合理主義ということになるわけです。その意味では中国人も、物を見る目という意味では一緒じゃなかったかと思うんです。だから中国人は、神を見る目の特別な働きというものが人間の頭の中に有るかどうかというようなことは、別に意識してなかったんじゃないかというふうに思うんです。この辺りは、文学の問題というよりは、思想の問題になってくるかと思うんですね。

近藤 ここ素人のあれですから、是非ご修正を。

加地 いえいえ、で私ふっと思ったのは、もし西洋人がラシヨナリズムだったら、何もかも自国に取りこんだ中国人は、ナシヨナリズムじゃないかと。(笑)

近藤 はあ、うまい。

加地 誤植じゃないかと思ったんですけど、やっぱり「ラ」だった。(笑)

近藤 最高！高度な落語。(笑) すこい。

加地 さて「戴震の『考工記圖』」ですが、すごくおもしろかったですねえ。これ、先生、会心の作やったんじゃないですか。この御本のハイライトがここにあるように思っただんですけども、どうでしょうか。

近藤 ありがとうございます。実は当時、佐伯有一さんが『史学雑誌』の「回顧と展望」(一九五五年)を書かれて、本年度論文中の白眉であるという過分のお褒めを頂いたものがこれであって、忘れられないんです。

加地 この論文の場合ですね、いわゆる資料的な意味のものは、そんなに先生引用じゃないんですね。しかし、非常に本質的な所、お読みとりになっていらしゃる。この論文、何と言いますか、非常に感銘を受けました。非常に得る所多かったですね。近藤 ありがとうございます。これはやっぱり少ないんですね。これをそういう風にわかって下さる方は少ないと思うんです。

加地 そうですか、はあ。で、「歴算学を学ぶことが、実証的

な学問、漢学に志す学徒のあこがれとなっていた当時では云云」(二七八頁倒数二行)とありますね。ここには、漢字と清朝考証学との関わりという大きな問題がありますが、ただですね、この漢代の学問にはもう一つ、オカルト的な要素もありますね。

近藤 ああ、大いに……。はいはい。

加地 それはどうなってるんでしょう。オカルト的な所は、清朝の学者、どういう風に考えたんでしょう。

近藤 はい、そこをその一生懸命、安居香山さんの例の。

加地 先生は緯書を考証の資料に取りこんだとおっしゃってますね。しかしそれは結果であって、やっぱり漢代自身の持っているオカルト性。例えば易の解釈にしても、奇怪な解釈をするわけですねえ。ですから、清人が漢学をモデルにした、漢学の訓の学というのを取り入れた、これはわかるんですけども、経学以外の所で渦まいていたオカルト、鄭玄にもその要素なしとしないですよ、緯書をどんどん取り入れてんですから。その辺はどうなんでしょう。

近藤 これ逃げるみたいですけど、漢学という言葉が非常に不用意でございすね。言われてみれば。

加地 「漢学」を削って「実証的な学問に志す学徒のあこがれ」の方がいいでしょうね。

近藤 いくつか楠山春樹さんが協同研究の最中に「近藤さん、あなたそういうこと言うんなら漢学という言葉使いなさんな。経学と言いなさい。」って言われたことがありまして、今もそれ思

い出しますけども……。

加地 ああそうですか。なるほどね。わかりました。

近藤 はい、非常に不用意。でもこれ他の人だったら、読み過ごしてくれるでしょうけどね。

加地 いえいえ。それから先生、『蛾術篇』（三四四頁倒数一行）の蛾子ですね。それから「沈楸愚」（三四五頁七行）の「沈」ですね。それから「吉士とは、戴震、特別に翰林院庶吉士を賜ったのによる」（三四五頁六行）というあたり、非常に親切な書きかたです。

近藤 そうですね。これはやっぱり、学生相手に長年講義持たせて頂いたおかげですね。

加地 なるほどねえ。それが専門家も、さっきありました「百」や「白」を、古文では百と読むんだというようなことを常識としない人が増えてきてるでしょ、最近。ですからこれは先生、そういう意味で非常に親切な書物であると思ったんですよ、ええ。

近藤 ありがとうございます。それとね、僕、逆にやっぱり教育された。吉川先生の学を。分りやすくする、ということ。

加地 師法をちゃんと。やっぱり戴震と段玉裁とですよ（笑）。それで実証主義問題（二九八頁）ですね、実証精神と言うべきでしょうかね……。それの方がいいんじゃないでしょうか。

「実証精神」と言う方が。

近藤 「主義」なんて言うより。

加地 「実証精神」の方がずっといいですね。実証主義いうたから一つのイデオロギーでしょう。それは、キリスト教の神学を乗りこえようとするイデオロギーですからねえ。

近藤 恐い。

加地 実証主義は歴史的なある限界を持っているものですね。限定を持っていますから。中国研究者はよく実証主義と言いますが、ヨーロッパの実証主義とごっちゃになってややこしい。「封建制」いうことばの場合と同じですよ、ヨーロッパの封建制と周代の封建とがごっちゃまぜになってる。で、三〇三頁の一番最後の行ですが「経に亞ぐもの」つまり第二次的な古典で、実はきわめて有意義なもの云々」ということですが、これどうしてこういう意識になったのか、ちょっとご説明頂けませんか。

近藤 あ、戴震・段玉裁を通してですね。気がついたおもしろい見方で、結局、我々漠然と経と見てましてもですね、その中に、経そのものところで言う経に亞ぐものがあると……。それを見事に見抜いてしまっていると、彼らは。特に戴震の場合そうだったと……。それで経に亞ぐものの場合に、我輩がそれに注を作るなり、あるいは何かそれを引きたてるような著述を作ることによって経まで高めてやるぞと……。少しも言わんけれどもそういう意識があったと。

加地 それはおもしろいですねえ。それは先生のご発見……。

近藤 ええ。

加地 これは先生もう少し声を大にしておっしゃったらいかがでしょうか。

近藤 いや、だいぶあちこちで……。

加地 そのことと関わりますが、書き方の悪いところはですね、近藤光男説ということがはつきりわからないところがある。

近藤 それは悪いことですね、確かに。(笑)

加地 そうです。これはいけませんね。(笑) つまり読者としてはですよ……。

近藤 意気投合しちゃいけない。(笑)

加地 (笑) 読者としてはですよ、私が例えば他に引用する場合ですね、近藤説として引用できるのかどうかかわからんから困りますよ。

近藤 これは言い訳ですけど、やっぱりこれは我輩が初めて言うんだとかね、我輩の発見だっていう風な書き方はしたくない。だからそう言わないでわかるようにするにはどうしたらいいんでしょうか。

加地 いや、やはり「私は」と言うべきです。それから先生、三二二頁に稿本と版本とを並べてお書きですが、我々中国学関係の者は稿本で研究する機会が少ないんですよ。

近藤 そうですね、ええ。国文の人はすごいですけどね。

加地 国文のアカデミズムは、ほとんどそればかりですねえ。中国では刊本がでてしまうと、稿本なくなってしまうんですね。ここんとこ国民性の違いみたいなもの感じます。

近藤 北京行つてね、図書館にもぐりこんでね、段玉裁の稿本があったと。『説文解字注』の前の、いわば『説文解字注』の長編みたいなのがあったといつてねえ、ああもう一生懸命探して下さいまして。そういうのに敬意は表しますけどね、段玉裁の身になってみたらね、俺の下書きそう見んでくれと。俺はちゃんと刊本を出してであると。ちゃんと公刊したもので見てくれと。例えば早い話、私、下書きがいっぱい家にありますけども、死んだ後で誰かがそれひっくりかえして原稿は前にこういうの書いておつたと見つけるの、それはあんまりよくない。

加地 (笑) はあ、舞台裏は見せんと……。表芸の舞台の方を見よと。それわかりますねえ。私、書齋には人を入れないですよ、絶対に。

近藤 入れたくないですねえ。

加地 入れたくないですねえ。(笑)

近藤 死ぬまでに焼くことですな。(笑)

加地 (笑) そうです。舞台裏があるんですよ。これは見せないですよ、やっぱり。血と汗と涙とで得てきたものをね、そう簡単には。(笑)

近藤 研究の頂点をのみ押さえて書くと。これで俺を知ってくれというような、そういう心境で。

加地 美学、美学だ。

近藤 そう美学。そういう美学に対してね、稿本引っぱり出してきてね、この字は注釈してたとか、あの字は注釈してなかつ

とか、それやられたら段玉裁は俺の学問がわからなくなるじゃないか、と言いたいんじゃないかと……。いやただ、いつもそうだとはいけません。この場合なんか、なかなかおもしろい。

(笑)

加地 そうですねえ。やっぱしおもしろいですねえ、稿本があると(笑)。書き直して書き直して(笑)。どっちに味方するかわからない。

近藤 (笑) いや、本当に真実……。

加地 我々、やっぱり稿本を使う機会が少ないものですから非常におもしろかったですね。だからここにこうあるじゃないですか、「この自然な感情の筆端にあふれたままの稿本の姿に、人間戴震の(笑)存在を身近かに感じることができる」と(三一五頁六行)。これ先生ご自身がお書きですよ。やっぱり稿本いりますよ(笑)。稿本をつつきまわしたら何かその……。第

一ねえ、筆端にはある程度やっぱり性格が。神経質な感じの筆やら、豪快な筆やら。稿本は珍しいですから、こういうのはおもしろいですねえ。(次号につづく)

後記：この対談は、平成元年三月一日(水)、東京の学士会館において行なった。『清朝考証学の研究』を出版した研文出版の山本実氏が同席、午後一時から五時二十分まで対談した。その録音テープを、大阪大学文学部中国哲学研究室(佐藤一好、藤居岳人、矢野野隆男、湯城吉信)において四百字詰原稿用紙約二六〇枚に写しとった。その後、近藤先生と私とが協力して約八十枚に修訂した。上下二回に分載する。談論風発し、冗談が飛び交い横道へそれではもどる雰囲気すべて収録できないのは残念であるが、ノーカット版テープは、近藤先生ならびに弊研究室がそれぞれ蔵有している。(加地)